
未来へ

亜紅亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来へ

【コード】

N3008Y

【作者名】

亜紅亜

【あらすじ】

組織との対決も終え、無事に復学した新一。
その新一の身に異変が・・・

二話

それは突然だった。

いつものように寝坊して、蘭が起こしに来て……学校へ行って茶化されて。

そんな日常がこれからも続いていくのだと思っていた。

でも

そんな時でも、俺の未来は音を立ててガラガラと崩れていっていったんだ。

～体育中～

今日は俺の得意なサッカーだ。

いつもは楽しくてしょうがないけれど、今日は何かが違う。

体全体がだるいのか、一歩踏み出すのがすごく疲れる。

軽い眩暈までしてきた。

(こりゃ～昨日遅くまで小説読んでたからか……ははは)

そう。昨日は優作の新刊の発売日であった。
一度読み出したらとまらなくなってしまい、寝たのは今日の4時である。

(でもおかしいな……。いつもは寝てなくてもサッカーやってたんだけどなあ……)

なんてことをのんきに考えながら居るとどこからか鋭い声が聞こえてきた。

「工藤！……後ろ！……！」

「え？」

サッカーボールだ。

誰かが変な方向に飛ばしちまったのか、と思いながらとめようと体を動かし

動かなかった

そして意外に威力の入ったボールが新一の後頭部に直撃した。
そして俺はそのまま、崩れ落ちた。

「工藤!!!?!?!」

「つてええ〜」
崩れ落ち方が派手だった分、心配も大きかったが本人は普通に起き上がる。

「・・・なんだよ。大丈夫そうじゃんか」
新一の様子を見て安心したようだ。

「でも珍しいよな。工藤がボール受け損なうなんて。
いつも難なくやってんのによ」

「あ・・・ああ。
そうなんだよな〜。今日はなんだかつ?!」
その時だ。

右のこめかみから、左のこめかみへ激痛が走った。

「く・・・工藤?」

「くつ・・・つ・・・う」

その間も激痛が走っていた。

(・・・なんだ？この痛み・・・。唯の頭痛じゃないみたいだ・・・)

「おい！中道！職員室に行つて救急車を呼んできてもらつてくれ！」
あまりにも痛がる新一をみて、教師が指示したのだ。

「おい！しっかりしろ！」

「救急車呼んだからな！」

「工藤！」

そんな声を聞きながら、新一の瞼は閉じられていった。

二話（後書き）

．．．．すいません！文章構成下手ですみません！！！！
頭の中ではこのとーりに新一たちが動いてるんですけどね．．．．
^：^

いつも頭の中は「ミニ・劇場」ですねw
そのまま文章に出来たらいいのに．．．．
文字にするって難しいですね><

コメントお願いします

一話

神様は不平等だ。

だって新一は世のために命をかけて巨大な組織と戦ったんだよ？
何日も生死の境を行ったりきたりして……

それにいつだって事件を解いてる。

一年前、居なくなる前は遊び半分なおこるもあった。
でも今は違う。

どんなに小さな事件でも大きな事件でも、ことの大きさは一緒だつて。

命の重さに変わりはないって。

言ってたんだよ？

それに、いつも私を気遣ってくれる。

優しい言葉、かけてくれる。

ちよつとしたことにも気がついて……

神様お願い

新—を奪わないで

一話（後書き）

初連載小説です！

文章も下手ですし、意味不明なところのほづが多いかもしれません

^^；

ですが温かい目で読んでくださると嬉しいですよ^^

三話（前書き）

・・・一話と二話逆になってしまいました><
申し訳ありません・・・：
読みにくいかもしれませんが耐えてください！え

三話

シンイチガタオレテレビヨウインニハンソウサレタ？

・・・嘘だ

サッカーなんてあいつの得意科目じゃない
それなのにどうして・・・？

そんな考えを巡らせながら私は学校を飛び出していた

（数十分前）

科目は保健体育

男子はサッカー

女子は保健だった

蘭たちは教室を移動していた

たわいもない話をしながら

「そうそう、蘭。駅前に評判のいいクレープ屋が出来たのよ！
学校帰りにでも行かない？」

「園子って情報が早いんだから。」

うーん今日は無理かも……。新一の家寄らなきゃいけないし」

「そっかー残念」

なんて話しているときだった

「え？救急車？」

「誰が運ばれたの?!」

「校庭で男子だから・・・うちのクラスじゃん!!!」

「えーマジ?!」

そんな会話が耳に入った

え？運ばれた？

でも今日はあまり日が出てないから熱中症はない
風邪気味や体調が悪そうなのはいなか・・・った・・・？

そのとき朝のことがよみがえった

だるそうにしてた

無理に笑っていた

もしかしたら・・・新一が？

そのとき、一番聞きたくない言葉が、耳に入った

「工藤君が倒れて病院に搬送された」

三話（後書き）

・・・さてさて

次話は病院でのことです！

勘の良い方は気付くかには・・・？
W

四話

気付いたときには病院に居た

あの時そのまま学校を飛び出し、走ってきたみたいだ

通りかかった看護師に声をかけ、連れて行ってもらった

工藤新一様

病室につけられた名前が新一が居ることを示している

「新一・・・起きてるかな」

そつつぶやいてドアに手をかけた

ガララ・・・

「新一？起きてる？」

「？蘭。学校じゃねーのか??」

新一は点滴をしているだけだった

「・・・結構元気そうじゃない。運ばれたって言うからもっと重症かと思った・・・」

「ああ、睡眠不足と栄養不足と脱水症状とからしいからな」

「え？睡眠不足は分かるけど・・・栄養不足って」

その瞬間新一は顔を引きつらせた

「え・・・いや・・・ほら！最近事件があつたから！そのまま寝ちやつたりとかー」

「寝ちやつたりとかーじゃないわよ！人がどれだけ心配したと思つてんの?!?!?!」

そのままいい合いが続いたが、最後はふたりで笑いあつた

そのときは二人とも知らなかつたのだ

薄いドアの前に、
真実を告げるものが居る事を

四話（後書き）

お久しぶりです（””）

期末テストの関係でなかなか更新できませんでした
もーテストの馬鹿（ノ、）ノ（呪）

五話

ガラララ

医「ああ工藤君。お友達かね？」

すまんが検査結果と今後について話したいのだが……」

蘭「今後って……。」

新一、そんなに悪いんですか?!」

医者の意味ありげな言葉に、蘭は不安を覚えた

医「なあに。心配は要らないよ。」

ただ少し説教をするだけだね……。栄養不足なんかでまた来られちゃたまないから」

新「ははは……すみません

ってことで蘭。もう帰って良いぞ。心配かけたな……。」

蘭「ううん。」

でも検査結果。教えてよね!

じゃあバイバイ!」

ガラララ……

新「……で？」

医「では？」

新「唯の説教なんかではないんでしょう？」

僕達の話も外で聞いていたみたいだし？」

医「はは……さすが高校生探偵。

敵わないな」

新「誤魔化さないでください」

新一の目はもう笑っていないかった

その目は医者を見据えていた

医「では単刀直入に言おう」

「君の目は失明する可能性がある」

目の前が真っ暗になった

五話（後書き）

・・・はい

意味不明ですね。（、、1111）

わかってます！^^^；

その理由も変ですが、温かい目をお願いします（、、*）（、
）（、、）（、、*）

六話（前書き）

矛盾している点もあるかもしれませんがお許しください。
（、、
111）

六話

「キミノメハシツメイシルカノウセイガアル

新「その・・・可能性とは？」

もう何がなんだか分からなかった

ただ、平静を装おうとしている自分がいることしか

医「君はA P O T X 4 8 6 9を飲んだことがあるね。

その成分が今になって脳細胞を破壊し始めているんだよ」

新「脳細胞を・・・破壊・・・？」

何故今になって

解毒剤は完璧だったんではないのか

医「その破壊のせいで目につながっている大事な神経が傷つけられるかもしれないんだ」

新「その可能性を下げる方法などは無いんですか」

あつて欲しい

少しの希望をかけて聞いた

医「残念だが・・・」。

今の医療では不可能だ」

ひゅっ

開いていた窓から風が吹いた
まるで俺の頭を抜けるように
それほど何も考えられなかった

考えたくなかった

もう、何も見えなくなる

もう、蘭の笑顔を見られない

もう、景色も小説も園子も両親も、サッカー中継、暗号なにもかも

大好きな蘭さえ

二度と見ることは許されなくなる

そんなこと

ソ
ン
ナ
コ
ト
ラ
ン
ニ
ハ
ナ
セ
ナ
イ

六話（後書き）

脳細胞破壊で失明って・・・無いですよね（||。||。||。||）

すいません

医療知識ZEROなんで^^^:

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3008y/>

未来へ

2011年11月22日02時54分発行